

主 題 研 究

# 共に生きていくための資質や能力を育てる 国際理解教育の在り方に関する研究

(第1報)

教科領域教育室

福 士 幸 雄

大 村 淳 也

研究協力校

大迫町立大迫小学校

花巻市立南城中学校

## 研究の概要

この研究は、共感的理解を伴うような異文化との交流や体験活動の工夫をとおして、共に生きていくための資質や能力を育成する国際理解教育の在り方を明らかにするものである。

本年度は、2年次研究の1年次として、次の成果を得た。

共に生きていくための資質や能力の基盤として、多元性の理解、コミュニケーション能力が重要であることを確認できた。

他者とのかかわりをとおした体験とふりかえりを重視する参加型学習を取り入れた基本構想を立案することができた。

児童生徒の実態についての調査結果から明らかになった問題点と課題をもとに、それぞれの実態に応じたアクティビティを取り入れた推進試案を作成することができた。

キーワード：国際理解教育 参加型学習 多元性の理解 ふりかえり  
コミュニケーション能力 アクティビティ

## はじめに

今日、我が国では、様々な面で異文化との接触や国際化が進展し、国際社会に生きる日本人の育成が重要な課題となっています。このような社会状況に対応するため、教育課程審議会の答申では、「広い視野をもって異文化を理解し、異なる文化や習慣をもった人々と偏見をもたずに自然に交流し共に生きていくための資質や能力の育成を図る」ための教育の必要性を示しています。すなわち、これからは、異文化との共生を主軸にした国際理解教育の取り組みが求められているのです。

しかし、これまでの国際理解教育では、他国の生活様式や文化の理解、異文化理解、他国との協調など、主に文化理解を中心とした指導となることが多く、国際社会に生きる力としてはたらく資質や能力を育てる指導が十分とはいえませんでした。そのため学校では、異文化交流や体験などの活動は行われているものの、児童生徒が互いの文化の違いを知ることにとどまっていると考えられます。

このような状況を改善するためには、児童生徒・学校・地域の実態を生かし、他者の生き方や考え方を認めたり尊重したりする異文化への共感的理解を伴うような交流や体験活動の内容を工夫していく必要があります。

そこで、この研究は、共感的理解を伴うような異文化との交流や体験活動の工夫をとおして、共に生きていくための資質や能力を育成する国際理解教育の在り方を明らかにし、学校における国際理解教育の指導の充実に役立てようとするものです。

### — 研究仮説 —

小中学校の国際理解教育において、参加型学習を取り入れた異文化との交流体験活動を以下のように行うならば、児童生徒の共に生きていくための資質や能力が育成されるであろう。

- (1) 各教科・領域で獲得した国際理解に関する知識を実感をもった理解に導くような、異文化をもつ人々との共同活動を取り入れた交流体験活動を実施する。
- (2) 学習の各段階における気づきや相互の受容を促すようなふりかえりを行う。

共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本的な考え方

#### 1 国際理解教育についての基本的な考え方

##### (1) 国際理解教育とは

国際化の進展に対応し、次代に生きる日本人を育成するために、児童生徒に、文化的な素養や資質を身に付けさせるとともに、国際的視野を広げ、国際協調の精神を養い、国際社会の発展に貢献できる資質や能力を培う教育であるといえます。

##### (2) 学校における国際理解教育

自国と他国についての正しい理解を深め、偏見や未知からくる誤解をなくすために、一貫した計画のもとに、すべての児童生徒に豊かな人間性を育て、発達段階に応じて他国と協力・協調する態度を養い、その実践を促す教育であるといえます。

##### (3) 学校における国際理解教育の教育課程上の位置付け

中央教育審議会答申によれば、「国際理解教育は、各教科、道徳、特別活動などのいずれを問わず推進されるべきもの」と述べられており、このことから学校の教育活動全体で推進されるべきものであることは明確です。

一方、小中学校の教育課程は、各教科及び道徳・特別活動・総合的な学習の時間等の各領域から構成され、それぞれの指導計画を立案し計画的・継続的に実施されるものです。

前述のとおり、学校の教育活動全体で推進されるべき国際理解教育は、それぞれの教科・領域のなかに、その内容が分散しているものです。したがって、分散して存在する内容を一つのものに統合させる位置付けを検討しなければならないこととなります。

## 2 国際理解教育の重要性

国際理解教育は、基本的には1974年のユネスコ総会採択の「国際理解、国際協力および平和のための教育、ならびに人権および基本的自由についての教育に関する勧告」と1995年のユネスコ総会採択の「国際理解と国際協力のための教育」を受けたものです。

一方、国内においては1966年の中央教育審議会答申以来、折に触れてその必要性が示され、1996年の中央教育審議会第1次答申における「国際化と教育」によって、今日的教育課題として明確に示されることになりました。

以上のような歴史的背景を踏まえるならば、国際理解教育の重要性は自明のものといえます。現在の急速な国際化の進展にあって、個人の生活においてすら緊密な世界的相互関係なくしては成り立たない状況下にあります。したがって、世界の様々な文化、政治、経済体制をもつ人々と共存していくために、文化の多様性や人間としての同一性を尊重しつつ、同じ地球市民として交流し、理解し、連帯し、協力していかなければならないことは言うまでもないことです。

また、そのために果たすべき学校教育の役割は極めて大きいものです。

## 3 国際理解教育の学習内容についての基本的な考え方

中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」(平成8年7月)における「国際化と教育」によれば、国際化の状況に対応して以下の点に留意して教育を進めていく必要があるとされています。

- (a) 広い視野をもち、異文化を理解するとともに、これを尊重する態度や異なる文化をもった人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること
- (b) 国際理解のためにも、日本人として、また、個人としての自己の確立を図ること
- (c) 国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、外国語能力の基礎や表現力等のコミュニケーション能力の育成を図ること

このことから、国際理解教育における学習内容は、以下のように分類されると考えられます。

国際理解教育の学習内容

・異文化理解 ・自国文化理解 ・コミュニケーション能力の育成

また、こうした内容の学習の結果、最終的には人権尊重及び国際協力・国際協調の精神の育成が図られるものと考えられます。しかし、このような国際理解教育の目指す姿は義務教育段階だけで育成されるものではありません。したがって、児童生徒の発達段階に即した学習という観点からの検討が必要であると考えられます。

さらに、前述の中央教育審議会答申によれば「この教育を実りあるものにするためには、単に知識

理解にとどめることなく、体験的な学習や課題学習をふんだんに取り入れて、実践的な資質や能力を育成していく必要がある」ことが示されています。このことから、異文化をもつ人々との交流体験をもとにした実践的な資質や能力の育成を目指した学習の在り方という観点からも本実践を考える必要があります。

## 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想

### 1 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想

#### (1) 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の意義

共に生きることは、「自己を知ることからはじまり、自己と他者との関係を築く対話的過程であり、多様な学びの中で、自己を知ることからはじまり、自己と他者の関係を築いていくこと」であるにとらえることとします。

そのためには、身近な生活レベルにおける異なる文化をもつ人々との交流による関係の構築が不可欠です。しかし、これまでの各教科・領域の学習にあっては、それぞれ固有の目標のもとに学習が展開され、どちらかという知識・理解面や技能面の学習が中心であり、「わかる」「知る」という認知的側面が強かったと考えられます。そのため、各教科・領域の学習においては、共に生きていくための資質や能力を育てることには限界があったと考えられます。したがって、共に生きていくための資質や能力を育てるために、各教科・領域における学習の成果を生かしながら、総合的な学習の時間などにおける異文化をもつ人々との交流をとおして、実践的な資質や能力を育成することが重要になってきます。

また、学習内容の構成においても、生活を軸にした「世界」との相互依存関係、つまり身近な生活レベルという視点が重要です。児童生徒の多くは、異なる文化について多くの事柄を「知っている」が、それらを自分とのかかわりで実感をもって「わかる」という段階には到達していないものと考えられます。

こうしたことから、共に生きていくための資質や能力を育成することは、国際理解教育で重視されるべき目標であり、各教科・領域の学習により獲得した知識を実感をもった理解に導くために意義があるものと考えられます。

#### (2) 共に生きていくための資質や能力のとらえ方

前述のとおり「共に生きる」ということを、「多様な学びの中で、自己を知ることからはじまり、自己と他者の関係を築いていくこと」と考えることとしました。

「自己を知ること」とは、自国文化を学ぶことであると考えられます。これは、学校における教育課程が「日本人としての自覚を育成すること」を基本としていますから、各教科・領域の学習成果をもとに深めることが可能であると考えられます。

しかし、「自己と他者の関係を築くこと」とは、異文化を学びコミュニケーション能力を身に付けていくことであり、これは前述のとおりこれまでの各教科・領域の学習においては実践が困難であると考えられます。そこで、「自己と他者の関係を築く」ためには、大きく二つの要素が必要であると考えました。

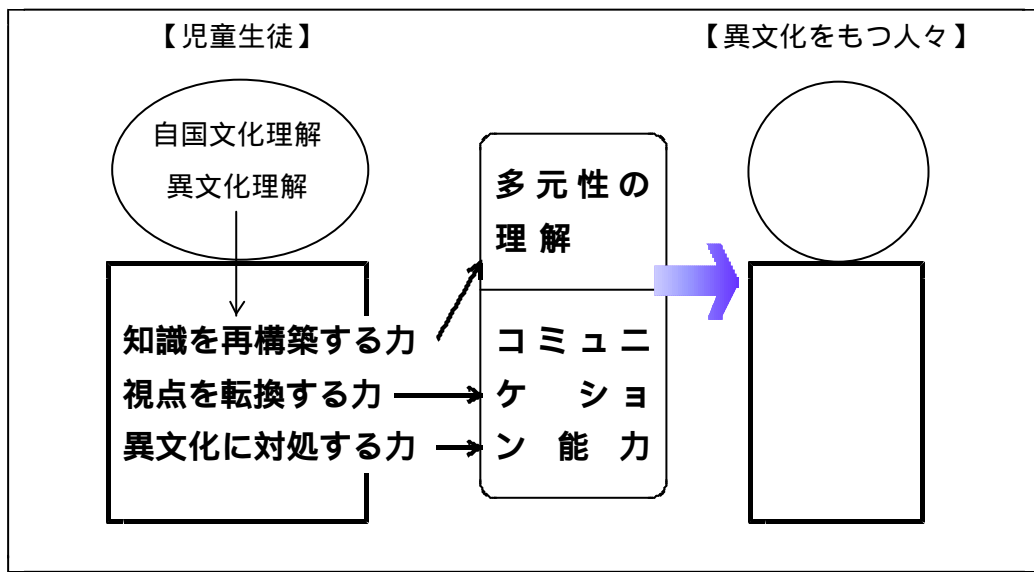
一つは、文化の「多元性の理解」です。これは自国文化に対する異文化というとらえ方をこえて、

相互の文化を対等なものとして理解することであると考えます。

もう一つは、「コミュニケーション能力」です。「多元性の理解」をもとに、異文化をもつ人々と建設的なやりとりをおこなうことができることと考えます。

そして、これら二つの要素を育成するためには、次の三つの力が必要であると考えました。「多元性の理解」を図るには、まず各教科・領域の学習の中に分散している国際理解教育に関する内容が基盤となります。それらを、自国文化を中心にした理解から、相互の文化を対等なものにとらえなおすために「知識を再構築する力」が必要であると考えます。次に、実際の国際交流の場面を考えると、交流の対象は文化そのものではなく、文化をもつ人々です。したがって、異なる文化をもつ人々の立場に立って考えるという意味の「視点を転換する力」が必要であると考えられます。そして、知識の再構築と視点の転換をもとにして、実際に異文化をもつ人々と意思の疎通を図るという意味での「異文化に対処する力」を高めることによって、「多元性の理解」及び「コミュニケーション能力」が育成されるものととらえることとします。これまでのことをまとめたものが下の【図1】です。

知識を再構築する力...各教科・領域における既習事項をもとに、異文化を多元的に理解し尊重する力  
視点を転換する力 ...異文化をもつ人々の立場に立って考える力  
異文化に対処する力...異文化をもつ人々と意思の疎通を図る力



【図1】三つの力の関係図

(3) 共に生きていくための資質や能力を育てる手だての在り方

ア 共に生きていくための資質や能力を育てる手だての考え方

国際理解教育において、必要とされる知識や技能は構造化されていない面が多く、また、異文化をもつ人々との交流を前提にしているため、知識習得型の学習スタイルでは対応できないものと考えます。したがって、学習過程を重視し、学習スキルの習得を目指した学習スタイルが必要です。具体的には、児童生徒の探究活動、共同活動、表現活動などを意図的に組み入れた学習活動のなかで、他者とのかわりをおとした自己の経験を見つめ直し、自分なりの結論を導き出せる手だてとしての学習

スタイルが必要であると考えます。

イ 共に生きていくための資質や能力を育てる手だてとしての「参加型学習」

こうした観点から、共に生きていくための資質や能力の育成を図る手だてとして、「参加型学習」を取り入れることとします。

「参加型学習」とは、単に生徒の学習への参加を重視したものではありません。「参加型学習」とは、学習者が主体的に参加しながら学ぶ学習方法であり、指導者が児童生徒に知識や技能を伝えるという従来の学習法とは異なるものです。この学習における授業者の役割は指導者としてのものではなく、児童生徒の気づきや相互の受容を促すことにあります。

そこで本研究では、「参加型学習」を学習活動のなかから新しい発見や気づきを導き出し、児童生徒間の話し合いをとおして、自分たちの考えを見つけだす学習ととらえ、交流体験とふりかえりをひとまとまりのサイクルになるものとしします。

ウ 「参加型学習」の進め方

「参加型学習」は、参加者自らの知識や体験に基づいて、参加者相互の交流による演習をおこなうことによって、問題の現状や原因に自ら気づき、解決方法を考えていく形態の学習です。また、参加型学習における演習をアクティビティといいます。アクティビティは、現実に体験できない事象について仮想体験をおこなうためのものであり、学習のねらいや目的にあわせた一つの素材や話し合いの材料をつかったまとまりのある活動ととらえることとします。この体験をもとに、児童生徒のふりかえりを意図的におこなうことによって、共に生きていくための資質や能力に関する気づきと受容が促されると考えました。

エ 気づきや相互の受容を促すふりかえり

ふりかえりとは、何らかの体験後に、自分や相手あるいはグループのなかにどのような変化が起きているかに気づこうとする作業であり、気づいた事柄の原因や今後の課題を明確にするための考察をふくむものととらえます。参加型学習による体験と交流を効果的な学習に導くために、その体験をふりかえる時間を位置付けることが必要であると考えます。したがって、ふりかえりを交流体験の終了のたびに位置付けるものとしします。

その際、体験をふりかえりカードを用いて文字化し、さらに話し合うことで言語化することによって気づきと相互の受容を促すことが可能になるものと考えられます。

## 2 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想図

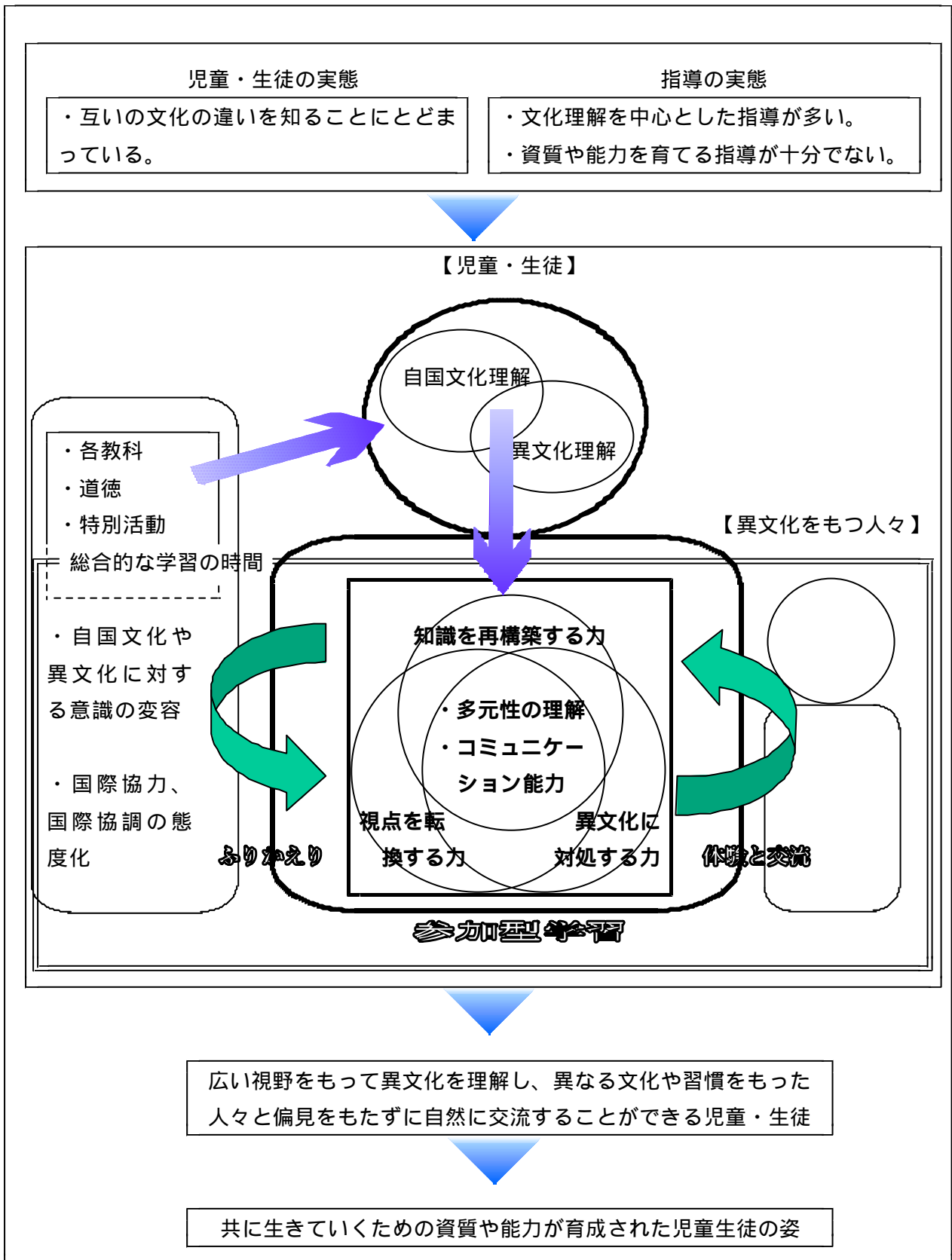
これまで述べてきた共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想図を次頁【図2】のように作成しました。

### 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する実態調査

#### 1 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する実態調査のねらいと内容

共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての推進試案作成のための参考資料を得ることを目的として、研究協力校の児童生徒を対象にSD法を用いた実態調査を実施し

ました。調査の観点及び内容については次頁の【表1】のとおりです。



【図2】共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想図

【表 1】実態調査の観点と内容

調査の観点	調査内容	
異文化をもつ人々との交流について、児童生徒が抱いているイメージ	魅力的評価	おもしろい ↔ つまらない 好きである ↔ 嫌いである やりたい ↔ やりたくない
	5段階尺度	
1 とても ++	価値的評価	正しい ↔ まちがっている 良い ↔ 悪い
2 どちらかというと +		重要である ↔ 重要でない
3 どちらともいえない ±	実用的評価	やさしい ↔ むずかしい
4 どちらかというと -		役に立つ ↔ 役に立たない
5 とても --		必要である ↔ 必要でない

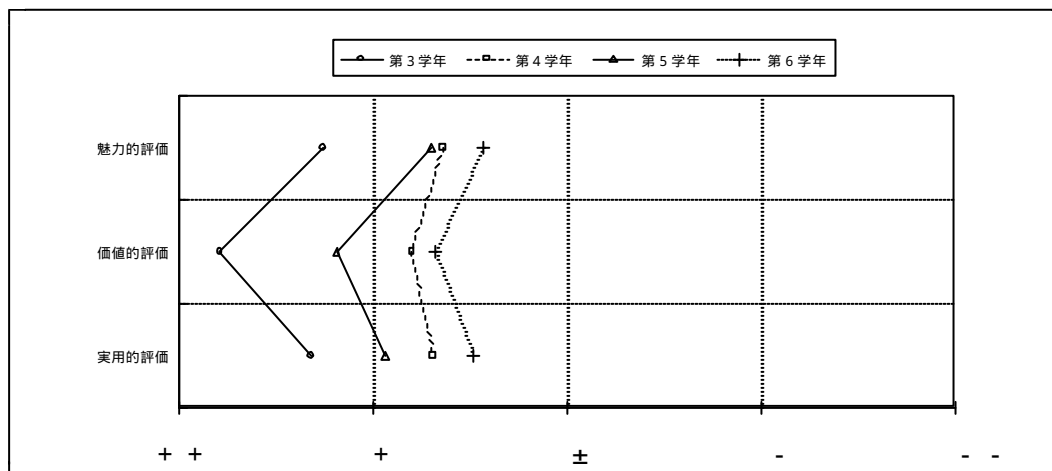
2 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育に関する実態調査結果の分析と考察

(1) 実態調査結果の概要

実態調査結果について、発達段階との関連を考えるために学年ごとに集計し、その平均値を求めたものが以下の【表 2】【図 3】及び次頁の【図 4】です。

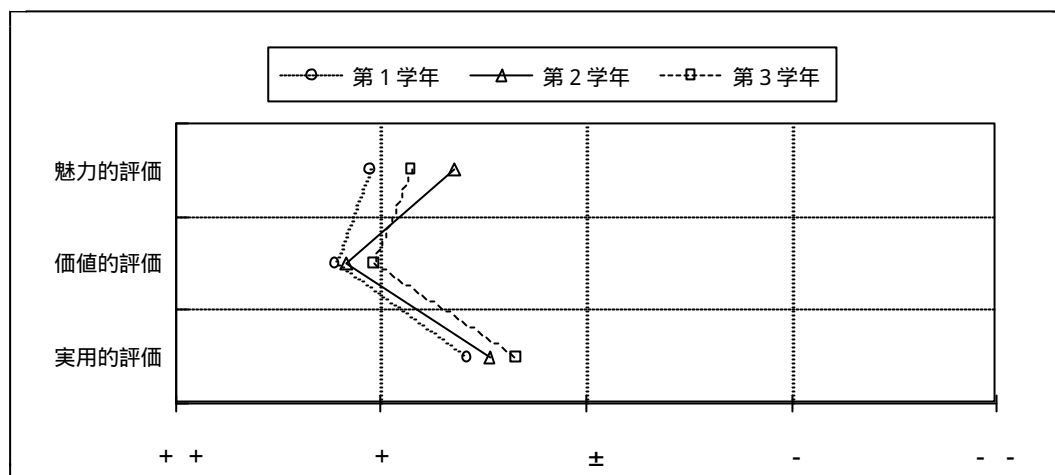
【表 2】異文化との交流に関するイメージ（5段階尺度）

	魅力的評価	価値的評価	実用的評価	人数
小学校第 3 学年	1.74	1.21	1.68	N=19
第 4 学年	2.36	2.20	2.31	N=34
第 5 学年	2.30	1.81	2.06	N=30
第 6 学年	2.57	2.32	2.51	N=25
中学校第 1 学年	1.95	1.78	2.42	N=73
第 2 学年	2.36	1.83	2.53	N=81
第 3 学年	2.15	1.97	2.66	N=85



【図 3】異文化との交流に関するイメージ（小学校）





【図4】異文化との交流に関するイメージ（中学校）

(2) 実態調査結果の概要についての分析と考察

前述のとおり、異文化との交流について児童生徒が抱いているイメージを、三つの評価項目に関して調査しました。その結果、次のことが明らかになりました。

どの項目とも学年平均は肯定的傾向にある。  
 三つの項目を比較すると、どの学年とも価値的評価に関する平均において肯定的傾向が強い。  
 肯定的傾向が最も弱いのは、小学校では魅力的評価、中学校においては実用的評価である。

前述の から、小中学校ともに平均値は肯定的な傾向にあることがわかります。からは、異文化との交流に関して、その価値を強く感じていることがわかります。その一方でからは、魅力及び実用性については肯定的な面が弱いことがわかります。

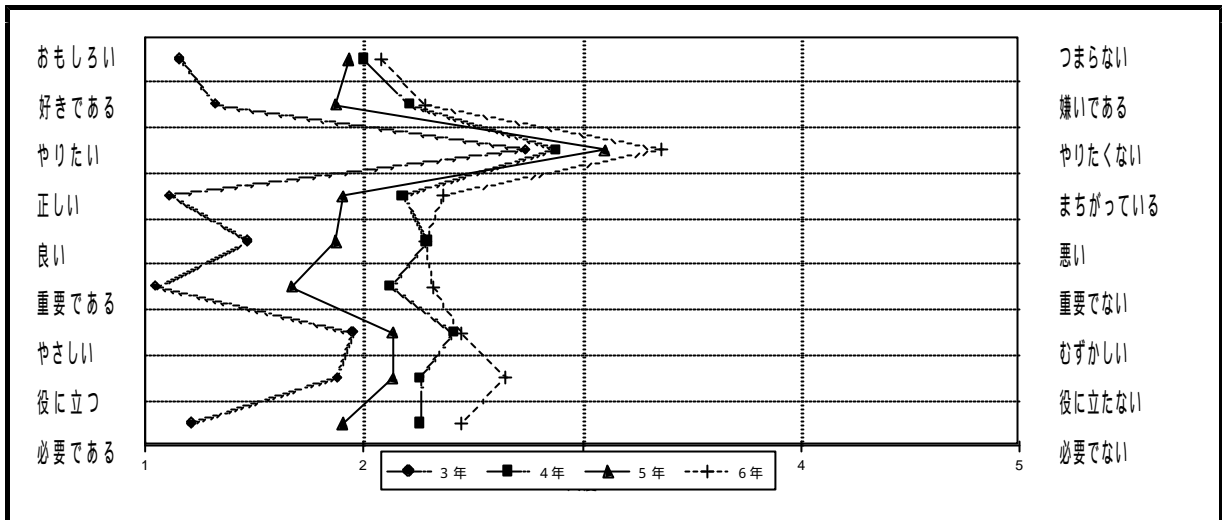
こうしたことから、児童生徒の多くは異文化との交流の価値は認めているものの、魅力や実用性に関してはさほど肯定的な感情は抱いていないものと考えられます。これらの原因を検討するために、小問ごとの分析が必要であると考えました。

(3) 実態調査の小問に関する結果

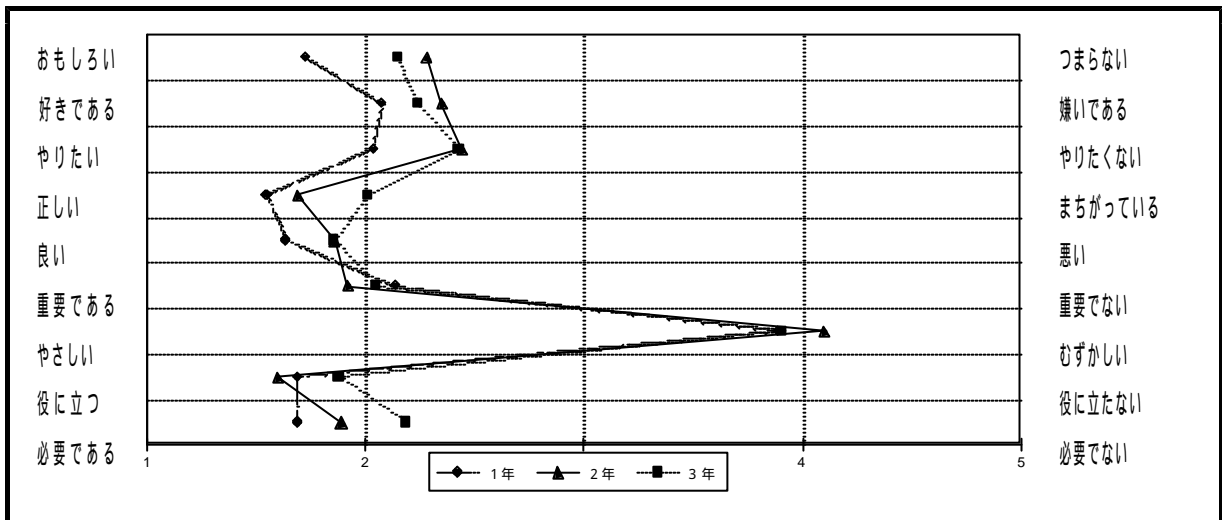
実態調査の小問ごとの結果について、学年ごとに集計し、その平均値を求めたものが以下の【表3】及び次頁の【図5】【図6】です。

【表3】異文化との交流に関するイメージ（小問ごと）

	魅力的評価			価値的評価			実用的評価			人数
	おもしろい	好きである	やりたい	正しい	良い	重要である	やさしい	役に立つ	必要である	
小学校第3学年	1.16	1.32	2.74	1.11	1.47	1.05	1.95	1.88	1.21	N=19
第4学年	2.00	2.21	2.88	2.18	2.29	2.12	2.41	2.26	2.26	N=34
第5学年	1.93	1.87	3.10	1.90	1.87	1.67	2.13	2.13	1.90	N=30
第6学年	2.08	2.28	3.36	2.36	2.28	2.32	2.44	2.65	2.44	N=25
中学校第1学年	1.73	2.08	2.04	1.55	1.64	2.14	3.89	1.69	1.69	N=73
第2学年	2.28	2.35	2.44	1.69	1.86	1.92	4.10	1.60	1.89	N=81
第3学年	2.15	2.24	2.43	2.01	1.86	2.05	3.91	1.88	2.19	N=85



【図5】小学校における異文化との交流に関するイメージ（小問ごと）



【図6】中学校における異文化との交流に関するイメージ（小問ごと）

小学校と中学校の分布の比較からは、次のことがいえます。

校種によって分布に差が見られる。

小学校に関する小問ごとの平均からは、次のことがいえます。

学年が進むにつれて、肯定的傾向が弱まる傾向にある。

もっとも肯定的傾向が弱いのは、「やりたい：やりたくない」の項目であり、特に第5、6学年では平均値が3.0を上回っている。

もっとも肯定的傾向が強いのは、「おもしろい：つまらない」の項目である。

また、中学校に関する小問ごとの平均からは、次のことがいえます。

小学校と比較して、どの学年も同じような傾向にある。

もっとも肯定的傾向が弱いのは、「やさしい：むずかしい」の項目であり、平均値は4.0前後である。

もっとも肯定的傾向が強いのは、「正しい：まちがっている」及び「役に立つ：役に立たない」の項目であり、平均値はおおよそ2.0以下である。

#### (4) 実態調査の小問に関する分析と考察

以上の結果から、共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育に関する実態について、以下のようなことが考えられます。

小学校においては、特に魅力的評価については肯定的傾向が弱い。しかし小問ごとに見ると、小問「おもしろい」及び「好きである」については肯定的傾向が強いが、小問「やりたい」についての反応には否定的傾向が見られます。このことから、魅力的評価の傾向については次のように考えることができます。

小学校における異文化との交流について、興味・関心には高いものがあるが、意欲の面で抵抗感が見られる。

中学校においては、特に実用的評価については肯定的傾向が弱い。しかし小問ごとに見ると、小問「役に立つ」及び「必要である」については肯定的傾向が強いが、小問「やさしい」についての反応には否定的傾向が見られます。このことから、魅力的評価の傾向については次のように考えることができます。

中学校における異文化との交流について、有用性及び必要性については肯定的であるが実践については抵抗感が見られる。

#### (5) 実態調査の分析と考察のまとめ

以上のことから、実態調査についてまとめると次頁のとおりになります。

ア 小学校と中学校ではそれぞれの実態が異なっている。

イ 小学校においては、総じて学年が進むにつれて肯定的傾向が弱まる。

ウ 小学校においては、異文化との交流についての興味・関心はあるもの意欲に欠ける面が見られる。

エ 中学校においては、総じてどの学年も同じような傾向にある。

オ 中学校においては、異文化との交流の有用性及び必要性については肯定的であるが、実践について困難さを感じている。

### 3 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する課題

共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する実態調査結果の分析と考察から、次の点が課題として明らかになりました。

- (1) 小学校、中学校それぞれのの実態が異なることから、それぞれに応じた手だてが必要である。
- (2) 小学校において異文化との交流をおこなうためには、学習意欲を高める手だてを講ずる必要がある。
- (3) 中学校において異文化との交流をおこなうためには、異文化との交流に必要なスキルトレーニングに関する手だてを講ずる必要があること。

## 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する推進試案

### 1 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する推進試案のための視点

基本構想及び実態調査の分析から明らかになった点をふまえ、推進試案作成のための視点を以下のように考えることとしました。

- (1) 共に生きていくための資質や能力を育てる手だてとして、他者とのかかわりをおとした自己の経験を見つめ直すための「参加型学習」を取り入れ、「ふりかえり」の場を意図的に設定すること。
- (2) 小学校においては、異文化との交流をおこなうために、異文化をもつ人々との交流意欲を促すためのアクティビティを設定すること。
- (3) 中学校においては、異文化との交流をおこなうために、異文化との交流に必要なスキルトレーニングのためのアクティビティを設定すること。

### 2 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する推進試案

ここでは、前述の推進試案作成のための視点に基づいて、「ふりかえりの設定」「異文化との交流意欲を促すためのアクティビティの設定」「異文化との交流に必要なスキルトレーニングのためのアクティビティの設定」及び「異文化をもつ人々との共同活動を取り入れた交流体験活動の設定」について具体的な手だてを考えることとします。

#### (1) ふりかえりの設定

前述のとおり、ふりかえりは気づきや受容を促すためのものであり、参加型学習による体験と交流を効果的な学習に導くために重要なものです。

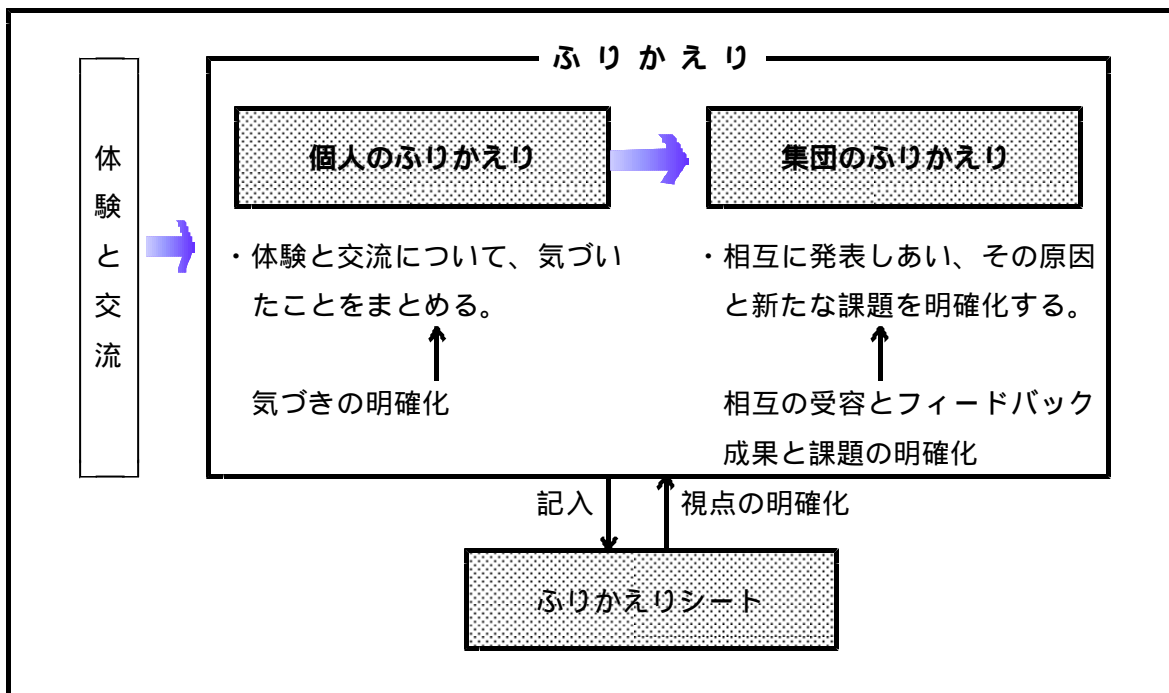
したがって、ふりかえりは、ひとまとまりの体験と交流が終了するたびに設定することが必要になります。

本実践においては、小中学校ともに2単位時間をひとまとまりとして5回、計10時間の実践を予定しているため、それぞれ5回のふりかえりを設定する必要があることとなります。

また、ふりかえりの在り方については以下のように考えることとします。

- ア 「個人のふりかえり」と「集団のふりかえり」の2段階にわけて設定する。
- イ 体験と交流のプロセスのふりかえりをおこない、視点を明確にするための「ふりかえりシート」を作成し活用する。

これらのことをふまえて、ふりかえりの内容をまとめたものが次の【図7】です。



【図7】ふりかえりの内容

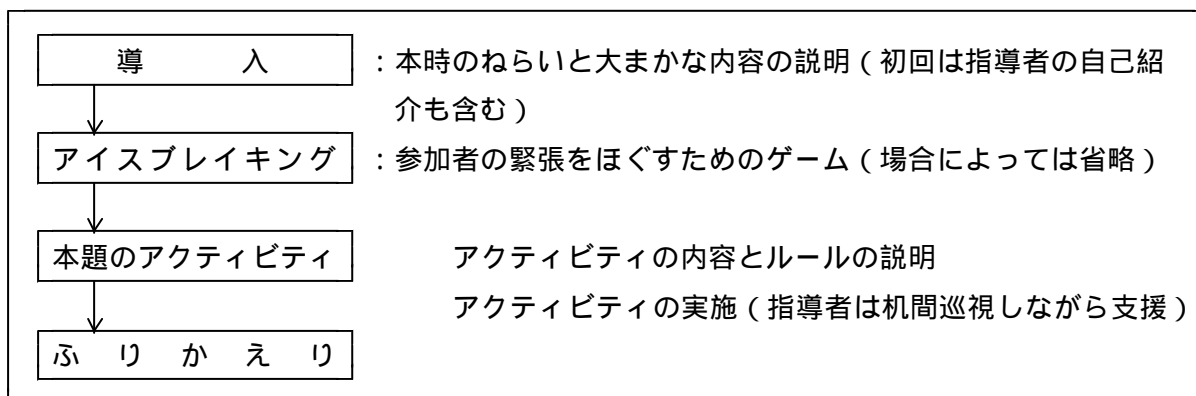
個人のふりかえりは、個々の生徒の気づきを文字化により明確にするためのものであり、それ自体だけでは、相互の受容やフィードバックがなされないと考えられます。そこで、個人のふりかえりを受けて、集団のふりかえりをおこなうことにより相互の受容やフィードバックがなされ、その結果、より具体的な成果や課題が明確になされるものと思われます。

また、「ふりかえりシート」については、体験と交流に関する児童生徒の気づきが漠然としていることが多く、それらを文字化することによって明確にするため使用することとしました。

「ふりかえりシート」作成にあたっては、取り組みによる変容や課題についての視点に留意することが必要であると考えます。

(2) 異文化との交流意欲を促すためのアクティビティの設定

一般的なアクティビティを取り入れた学習過程は、以下の【図8】のとおりです。



【図8】アクティビティを取り入れた学習過程

また、アクティビティを取り入れる際の留意点は次のとおりです。

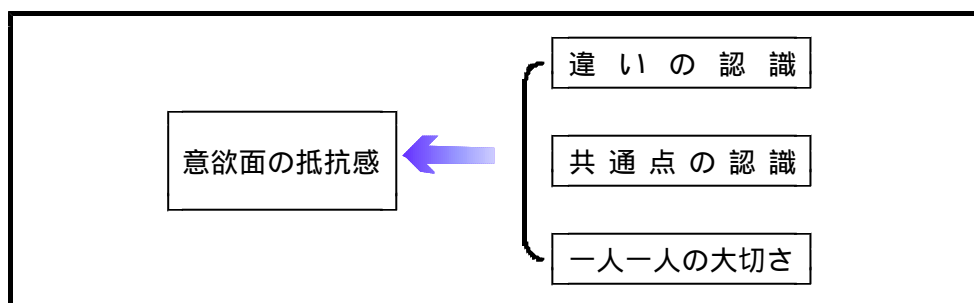
- ア 単なるレクリエーションにならないよう、気づきやふりかえりに結び付くよう留意すること
- イ 目的にあったアクティビティを取り入れること
- ウ 時間内に終結するよう内容や手だてを十分検討すること
- エ 児童生徒にとってアクティビティの必然性が感じられること

小学校においては、前述の協力校の実態調査から、異文化との交流について興味・関心には高いものがあるが、意欲の面で抵抗感があることが明らかになりました。

そこで、異文化との交流の前に、抵抗感を弱め、交流を促すためのアクティビティを設定することが必要になると考えられます。

意欲の面での抵抗感を弱めるためには、自分と異なる存在を排除せず、常にわかり合おうとする姿勢や、自分との違いを踏まえながら、お互いの共通点にも目を向けることが重要であると考えられます。

こうした観点に即したアクティビティとして、「違いの認識」「共通点の認識」「一人一人の大切さ」等にかかわるものがあり、これらのなかから発達段階に即したものを取り入れるものとします。以上のことをまとめたものが次の【図9】です。



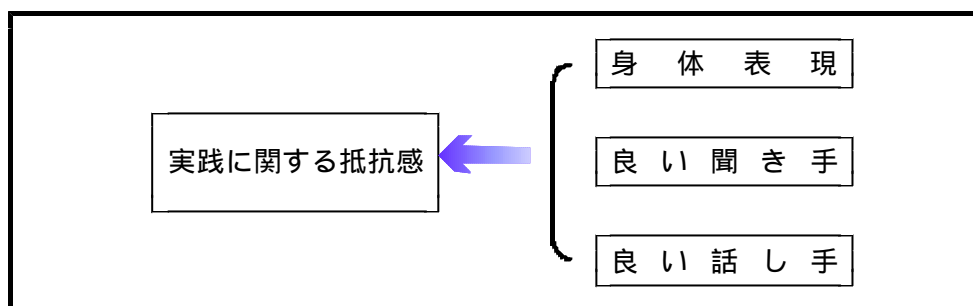
【図9】異文化との交流意欲を促すためのアクティビティ

### (3) 異文化との交流に必要なスキルトレーニングのためのアクティビティの設定

中学校においては、前述の協力校の実態調査から、異文化との交流に関する有用性及び必要性については肯定的であるが、実践の面で抵抗感があることが明らかになりました。

そこで、異文化との交流の前に、実践に関する抵抗感を弱め、交流に必要なスキルトレーニングのためのアクティビティを設定することが必要となると考えられます。

実践に関する抵抗感を弱めるためには、コミュニケーションに関する技術的な問題点の改善や、話し手及び聞き手としての心構えなどが重要であると考えられます。こうした観点に即したアクティビティとしては、「身体表現」「良い聞き手」「良い話し手」等にかかわるものが考えられ、これらのなかから、発達段階に即したものを取り入れることとします。以上のことをまとめたものが次頁【図10】です。



【図10】異文化との交流に必要なスキルトレーニングのためのアクティビティ

(4) 異文化をもつ人々との共同活動を取り入れた交流体験活動の設定

アクティビティをもちいて抵抗感を弱めることで、その後の異文化をもつ人々との交流をより有意義な活動にすることができると考えられます。

しかし、単に異文化をもつ人々との交流を設定しても、内容や手だてが十分でないにより効果的な活動にはならないものと考えられます。文化をもつ人々との交流において、一方的な講義や説明だけでは、異文化との共生の資質や能力を育成することはむずかしいと考えられます。このことから、異文化をもつ人々とともに共同して何らかの作業をとまなう体験をおこなうことが重要になってくると考えられます。また、共同活動をおこなうためには、複数の異文化をもつ人々を招き、グループごとの活動をおこなうことがより効果的であると考えます。

したがって本研究においては、各グループに1名の講師を招き、グループごとの共同活動をおこなうことが可能な試案を作成することとしました。

これまで述べてきた基本構想、実態調査及び分析・考察、推進試案作成のための視点をもとに次頁の【図11】のように推進試案を作成しました。

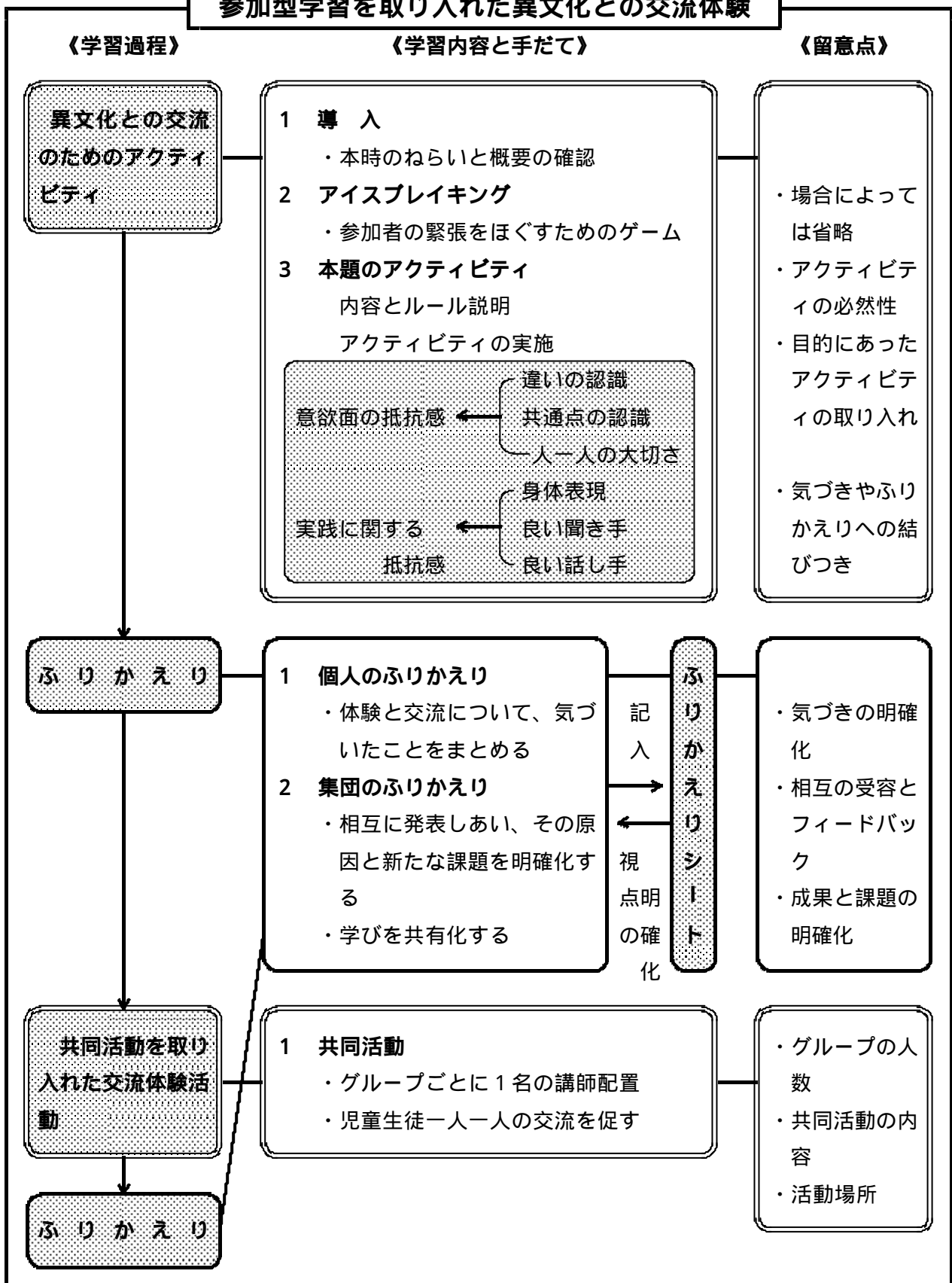
研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

今年度、共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する研究について、次のことが明らかになりました。

- (1) 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての基本的な考え方に基づき、参加型学習を取り入れた交流体験とふりかえりを手だてとした基本構想を立案することができた。
- (2) 基本構想に基づき、推進試案作成のために、異文化をもつ人々との交流について児童生徒が抱いているイメージを調査し、その結果を分析・考察することにより、国際理解教育の在り方に関する課題を把握することができた。
- (3) 共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方に関する基本構想と、推進試案作成のための視点に基づき、「ふりかえり」「アクティビティ」「交流体験活動」を位置付けた推進試案を作成することができた。

## 参加型学習を取り入れた異文化との交流体験



【図11】共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方についての推進試案



## 2 今後の課題

本年度の研究をふまえ、推進試案に基づく実践をとおして、小中学校における共に生きていくための資質や能力を育てる国際理解教育の在り方の具体的な方策について、実践的に究明していくことが課題となりました。なお、次年度の実践にあたっては、今後さらに検討を加え、児童生徒の実態により即した学習の展開を構想していくことが必要であると考えます。

## おわりに

この研究を進めるにあたり、ご協力をいただきました研究協力校の校長先生をはじめ諸先生方ならびに児童生徒のみなさんに深く感謝申し上げます。

### 【引用文献・主な参考文献】

- 岩手県教育委員会「小中学校指導資料 国際理解教育の手引き 教科・領域指導への提言」  
岩手県教育委員会 1987
- 宮原修 編著 学校変革実践シリーズ7「国際人を育てる」 ぎょうせい 1998
- 有園格・小島宏 編著 学校の創意工夫を生かす「総合的な学習の時間」の展開3  
「国際理解、福祉・健康の展開」 ぎょうせい 1999
- 北 俊夫 著 「環境と国際理解の教育」 東洋館出版社 1996
- 井上 祐吉/堀内一男 編 「中学校国際理解教育の進め方」 教育出版 1994
- 高階玲治 編 「実践クロスカリキュラム」 図書文化 1996
- 大津和子 著 「国際理解教育 地球市民を育てる授業と構想」国土社 1993
- 教職教養1月増刊号 新教育課程の論点『「総合的な学習の時間」全課程徹底理解』  
教育開発研究所 1999
- 国分康孝 監修 「エンカウンターで学級が変わる」中学校編 図書文化 1997
- 国分康孝 監修 「エンカウンターで学級が変わる」Part2中学校編 図書文化 1997
- 佐藤群衛 著 「国際理解教育 多文化共生社会の学校づくり」明石書店 2001
- 岩手県国際理解教育研究会議「小学校における国際理解教育の在り方について」 2001
- 鍋倉健悦 著 「異文化間コミュニケーション入門」 丸善出版 1997
- W・フォン・ラフラー=エンゲル 編著「ノンバーバルコミュニケーション」  
大修館書店 1981

### 【参考URL】

- 「国際理解研究会」 <http://www.joca.or.jp/ob-kai/krk/toppage2.html>
- 「開発教育」 <http://www.mahoroba.ne.jp/~dakara/kaihatu.htm>
- 「アイスブレイキング集」 <http://www.mahoroba.ne.jp/~dakara/ice.htm>
- 「構成的グループエンカウンター」  
<http://www.tosyobunka.co.jp/books/encounter/encounter0.htm>